

三聖一師二十巻をめぐって

山王神道における偽書の位相

門 風 温

1

中世の神道説においては、空海仮託のものを始めとする膨大な数の「偽書」が作成され、流布していたことは周知のとおりである。あるものは教説の核となり、またあるものは教説の新たな展開を促し、その存在は無視できないものがある。いや、それどころか、これら「偽書」こそが、中世神道説を生み出したエネルギーを象徴していると言っても過言ではない。しかしまた、「偽書」であるがゆえに研究の上では長い間等閑視されてきたことも事実であり、「偽書」の研究は未開拓の分野のひとつと言つてよい。そうした中世神道説に見る「偽書」の構造を明らかにするための研究は、今はまだ基礎作業の段階であり、今回の発表もそうした位置づけで考えていただければと思う。

中世の天台系の神道、いわゆる山王神道においては、『山家要略記』が最大の理論書であることは言を待たない。山王七社という山王信仰を具現化する体制が確立したあと、その教理的な解釈が進んできた、そのひとつの到達点がこの『山家要略記』と言つて良い。一方中世末から山王神道にも吉田神道の影響が及んできて変質が始まり、それがさらに近世にはいると天海の山王一実神道へと大きく転回してゆくが、その時も理論的な基盤となっている教説は、大体がこの『山家要略記』からの孫引きが中心であり、『山家要略記』が山王神道の言説形成

に果たした役割は非常に大きなものがあると言わねばならない。しかしこの『山家要略記』に関する研究というのは、その成立をめぐってはいくつか研究があるものの、肝心のその内容に関する研究はほとんどなされていないと言つて良い。その理由は、異本が多く、しかもその相互の関係が非常に複雑であることから、その名前は早くから知られながらも長らく活字化がなされなかったことによる。しかし、2年程前に神道大系の「天台神道（下）」に神宮文庫本と仙岳院本他が翻刻されて、ようやく共通のテキストを得るに至った。また、続天台宗全書にも叡山文庫天海蔵本が収録されて来年度中にも刊行の予定であり、これで主要な伝本が揃つことになる。そこでこの機会に、今後の山王神道研究のひとつの方向をさぐる意味で、『山家要略記』に引かれる山王神道の「偽書」について、すこし述べてみたい。

『山家要略記』の成立は、鎌倉末から南北朝にかけて、成乗坊義源の手によつてまとめられたのであろうといつことで、大方の見方は一致している^①。その内容は、独自の著作と言つよりは、むしろ「山王神道教説集」成「とでも呼ぶべきもので、主に山王七社を中心とする本迹関係について、細かな事項をひとつひとつ箇条書きにして、それについてそれぞれ典拠となる諸書を引用して説明したものである。引用される典籍は、仏教経典はもとより、日本書紀や旧事本紀といった史書から、五行大義や太極図説のような漢籍まで、実に広範に涉っているが、なんと言つてもその中心は素性のはっきりしないいわゆる「偽書」の類で、その引用回数は全体の半数を超える。これらの偽書の中には、大江匡房撰とされる『扶桑明月集』や、都良香撰とされる『扶桑古語靈異集』なども含まれているが、ここで着目するのは叡山の祖師たちに仮託された、いわゆる「三聖一師二十巻」と称する書である。具体的には、最澄『三宝住持集』、円仁『三宝輔行記』、円珍『顯密内證義』、安然『四明安全義』、良源『御遺告』の五部ことを呼ぶ。

華蔵院本『山家要略記』には、次のような項目が挙げられている^②。

一 顯 二 密 三 戒 四 記 已上
付記録六章事

淨刹結果 安置仏像 嚴神靈応

鎮護国家 法住方軌 禅侶修行 已上

散在流章記 口云、他流記引用之云々

雜記 総目録 自他共知也 別目録 名字体知不知也

秘目録 名義共不知也 面授決 已上成乘房面授詞記之

一 三聖二師二十卷記録事

三宝住持集上下二卷 山家御釈

三宝輔行記五卷 前唐院御釈

顯密内證義上下二卷 山王院御釈 已上三聖

四明安全義十卷 五大院御釈

御遺告一卷 御廟御釈 已上二師

これを簡単に説明すると、まず叡山には顯教・密教・戒律・記録の四部があり、「記録」というものが、顯密の教学や戒律と同様の宗教実践とみなされていた。さらに、記録には六章あるいは六科と呼ばれる分類があり、それぞれ淨刹結果章は七重の結界に関する事、安置仏像章は九院十六院の本尊、嚴神靈応章は吾山の開闢や諸天・聖衆の瑞応、鎮護国家章は天子本命の道場や鎮護国家の秘密念誦、法住方軌章は三学の靈場と顯密軌則、禅侶修行章は六条八条四条の学生式に関する事を記録する。そして、記録の中でも最重要の書が、天台宗の祖師たちである最澄・円仁・円珍の三聖、安然・良源の二師が記した「三聖二師二十卷」といつことになるのである。

ところで、実はこの「三聖二師二十卷」は二冊として現存していない。残欠はもちろん、実際に見たという記録すら残っていない。今我々は『山家要略記』や『溪嵐拾要集』といった山王神道の言説を類化した書籍中の引用を通してのみ、その内容に触れることができる。たとえば九卷本『山家要略記』には、書名の明確な引用が全部で四百余項目あるが、そのうちこの「三聖二師二十卷」だけで約五分の一をしめる。割合としてはかなりのものだが、試みにそのすべてを抜き出してみたところ、量としてはわずかなものであった。総じて二十卷といふことであるから、全巻そろっていればかなりの分量になるはずであるが、実際は二巻分にも満たないであろう。しかし、これ以降の「三聖二師二十卷」に関する言説は、そのほとんどが『山家要略記』の孫引きであり、その意味では、これが現在我々が目にするこの「三聖二師二十卷」の内容のほとんどにあたる⁽⁴⁾といえる。

始めにも述べたように、『山家要略記』の叙述形式は項目ごとの箇条書きで、たとえば「山王者震旦天台山鎮守明神事」という項目では、『三宝輔行記』を引いて「先師求法帰朝の海中に在りて云々」と、天台山の鎮守が円宗擁護のためにわが国に東漸してきたことを述べるように、各項目典拠となる書目を挙げ、その原文を引いて説明する。『溪嵐拾要集』の該当部分もほぼ同様の形式である。ここには、山王神道の記録をめぐる三つの異なる位相が含まれている。それはさきに挙げたように、「記家六章」という分類と「三聖二師二十卷」なる典籍、さらにこれらの言説を収録する『山家要略記』や『溪嵐拾要集』の三つである。わかりやすく書き直せば、

「記録六章」…言説の分類・ストック

「三聖二師二十卷」…直接言説の典拠となる書籍

『山家要略記』『溪嵐拾要集』等…言説の集成

という三つのレベルを使い分けることで、言説の重層化・構造化を図っているのである。

山王神道の神道説の集大成ともいえる『山家要略記』や『深嵐拾要集』はこのレベル および からの引用が骨格をなしている。そこで本稿の結論を先取りして言えば、「近たる」「三聖二師二十卷」は実在しない架空の書物だったのではないが、これは推論と云うより、むしろ作業仮説と言った方がよいかもれない。しかし、そうした前提に立って見てゆくと、たとえば次のようないくつかの興味深いポイントに気がつくのである。

『山家要略記』の出典には、「三宝輔行記云」「顕密内證義云」といふと同様に、「厳神靈応章云」「浄刹結界章云」といふのもある。つまり、「浄刹」ではないわゆる「記録六章」と「三聖二師二十卷」が混在している。また『深嵐拾要集』巻八は内題に「厳神靈応章卷三」とあって、十巻めったとも言われる『厳神靈応章』の一部ではないかとする説もある。しかし、その内容には「三宝輔行記云」「顕密内證義云」といふのと並んで「厳神靈応章云」といふ引用も見え、「厳神靈応章」が「厳神靈応章」を引くといふ不自然なところになっている。

さらに、「厳神靈応章」とされるのと同内容の文章が、他の本では『顕密内證義』や『御遺告』の文章として引用される例がある。

つまり、レベル との境界ははっきりしないことになっている。しかし一方、『山家要略記』所引の「三聖二師二十卷」を見る限り、この「三宝住持集」以下の五部の書物相互の間には、錯綜は全くない。『山家要略記』を読むと、異なる巻に同じ話が重複して出てくるので、杜撰な編集のような印象を受けるが、実は内部では見事に統制がとれているのである。たとえば、『三宝住持集』は当山の由緒に関わる言説、『三宝輔行記』は大宮の本迹を、『顕密内證義』は山王三聖、『四明安全義』は山王鎮護国家のこと、『御遺告』は十禅師に関する言説を扱っていると思われる。これは実は「三聖二師二十卷」だけに限らないので、たとえば『神祇宣令』は山王三聖以外の八王子や三宮を扱うときに引かれ、『扶桑明月集』は三輪や八幡、熊野に関して述べる時に引かれるといったように、かなり周到な計算がなされていることを感じるのである。

さらに、『山家要略記』の各項目には、ほとんどの場合「口伝」がセットになっている。古い形式を残す伝本では「裏書き」されているそれらの口伝を介することによって、言説の真の意味が明らかになれる。また「偽書」とそつでない経典や典籍とがその裏の意味を介して結びつけられる。そのような仕組みでもって初めて、これらの言説は命を吹き込まれるのだと言ってしまう。したがって、『山家要略記』は引用される典籍と口伝とを併せ読まなければならないのであるが、口伝について系統だった研究はまだまったくなされていない。

もし、さきに立てた仮説のようだと、「三聖二師二十卷」が実在しない「偽書」であったとするならば、山王神道の言説の中核は、これら架空の書籍群のつれに成り立っていることとなる。この一見断片的でまとまりのないように見える言説の束を、口伝といふ糸によってうまく綴り併せることで、あたかも大きな「綴れ織り」のようになり、ひとつの体系が存在するかのように見えるのである。

「つじつま非常によくできた」「装置」の背後には、やはり「記家」といふ集団の存在が大きく与っているとされる。叡山の「記家」については比較的早くから注目されており、戦前の裕慈弘氏から最近では黒田俊雄氏まで研究もある⁹⁾。しかし、記家の実態についてはいまだよくわかっていない。最初にも紹介した叡山の顕・密・戒・記の四部のうちの記家、つまり記録管理の専門集団であり、叡山のテクノクラートでも言うべき存在であったらしい。彼らが「一流相伝之外、不及散在之流布」といえば、その具体的な内容は彼らの口を通してしか窺い知ることができない。つまり、言説に対してかなり厳格なコントロールが可能であり、それによって戒家ほかの集団への影響力を保持していたのだと思われる。その中から叡山の神に関する言説を、義源の手によって口伝をも含めて整理・編集し、一個の書物にまとめたのが、この『山家要略記』である。おそらく『山家要略記』の構造は、そのまま記家のシステムの構造を反映していると考えてよいのではないだろうか。

閑話休題、ここで眼を中世神道説のもう一方の雄である西部神道に向けてみよう。周知のように、西部神道では『天地麗気記』に代表される空海に仮託された神道書を中心とする数多くの「偽書」が実際に作成された。そして、それらの「偽書」を引用する形で言説が継承され、また新たな言説へと発展していった。そうした展開の背景にあるのは、いわばブレテクストに対する解釈の自由、注釈の自由でも言いつべきものである。ときにそれはとんでもない逸脱をさえ生み出すことがあるが、同時に言説生成の原動力ともなっているのである。最近の研究では、こうした西部神道説生成の主要な「場」は伊勢にあって、伊勢の神宮周辺を舞台に、園城寺や醍醐寺や西大寺に属する僧侶たちが入れ替わり立ち替わり登場し、そこに内宮や外宮の祠官が加わって、あやしげな「言説のキヤッチボール」を繰り広げていたらしいことがわかってきた⁹⁾。常に固定した相手ではなく、めまぐるしく変わる相手とのやりとりの結果、ボールが思わぬ方向へ変化をしたり、後ろへそらしたりといった、言説生成のダイナミズムを生じたとも言える。

「いつ」したいわばアンコントロールな解放性のある西部神道の言説形成に対し、記家と「いつ」管理者による言説の厳格なコントロール下にある山王神道は、一見まるで正反対を指向しているように見える。しかしおそむくそうではないだろう。西部神道の言説形成を支えているのは、基本的に「嫡嫡相承」に代表されるような、密室の中での「対一の伝授を核とした知の継承方法である。そこで伝えられる知は、漢籍のように万人に開かれた「読む」テキストではない。それらはいわば「閉じられた」テキストであって、師から所作（印）や声（真言）や象徴的な絵図などを示されることによって初めて開かれる。それは決して「読む」のではなく、全身で「理解する」テキストなのである。ところで、以前山本ひさ子氏も指摘されたように、記録を旨とする記家の真骨頂もやはり口伝にある。目に見える表の意味に対して、目に見えない裏の意味を付加することによって、初めて真の意味にたどりつけるという、いわば知の密教化とでも言いつべき思惟が、記家の存在を支えているのである。

先に考察した三つのポイントと照らし合わせてみると、「三聖二師二十卷」の説得力も、単に「それを祖師たちが書いた」という虚構の事実のつえに成り立っているのではおそらくない。祖師が書いたとされる言説に口伝が付加されることによつて、「今明がされる真実」が立ち上がる。そこにこそ強い説得力の源があるのではないが、それは言い換えれば一種の解釈に他ならないのだが、口伝と「いつ」注釈のありようを、それによつて生み出されるパリエーションの豊富さが、中世の神道説の豊かさなのではないだろうか。そのように考えれば、「三聖二師二十卷」「自体、現実に二十巻の本としてこの世に存在する必要性はなかったとさえ言えるだろう。」「三聖二師二十卷」という聖典は、記家が守る、お山の幻想図書館「の柵の奥深くに永遠に秘蔵されたままなのである。

4

「ここで話を山王神道全体の流れに戻すと、自ら『山家要略記』をまとめて口伝の体系を明らかにし、さらには光宗に伝授することによつて『深風拾要集』を生み出した義源のしたことについては、山王神道の質を大きく転換する重大なことだと言える。もちろんそれは義源が突出した異端者であったという点ではない。時代の要請が義源をしてそうせしめたのであろうし、それはほぼ同時代の慈遍の活動なども併せて考えてゆかねばならない。そして当然慈遍を介して、両部や伊勢にもつながってゆく、中世神道説全体を覆う問題でもあるだろう。義源がなしたことの評価と「いつ」も、もう一度きちんと考えてみる必要があるのではないかと思ふ。

シンポジウムと「いつ」ここで、とにかく視点を提示しようと考えたが、非常に大雑把な話になってしまい、具体的な言説を検討するところまでではいたらなかった。正直いざやり始めてみて、「口伝」もひとつひとつ検討しなければ、他の偽書との関係も整理しなければと、思ったよりずっと時間がかかりそうだとわかった。すべては今後の課題とさせていただくことで、本日の発表の締めくくりとさせていただきます。

「附記」本稿は、大会当日のシンポジウムにおける発表原稿に、若干の加筆補正を行ったものである。当日「質問下さった諸先生方への回答を本稿に反映させることができなかつたのは、ひとえに筆者の怠慢のせいである。今後の研究でお答えする」ことで、どうか「容赦願いたい」。

③菅原信海『山王神道の研究』（春秋社、一九九二）、大島亮幸「円融藏本山家要略記の成立に関する一考察」、野本覚成「山家要略記の全体像」（ともに『天台学报』二五、一九八三）、佐藤真人「神道大系『天台神道（下）』収録文献解題」（一九九三）。

④前掲菅原著作・佐藤解題の他、野本覚成「山家要略記」属諸本と成乗房義源の位置」（『天台学报』二六、一九八四）、「成乗房義源の行跡」（『天台学报』二七、一九八五）。

⑤神道大系『天台神道（下）』（一九九三）。

⑥発表当日は、『山家要略記』所引「三聖二師二十卷」本文一覽を参考資料としてお配りして、話を進めた。本稿はそれを掲載するだけの紙数がないので、以下の論旨に多少わかりにくいところが生じるかもしれないが、「容赦願いたい」。

⑦裕慈弘『日本仏教の開展とその基調（下巻）』（三省堂、一九五三）、黒田俊雄『日本中世の社会と宗教』（岩波書店、一九九〇）、窪田哲正「戒家と記家の交渉」（『フィロソフィア』七〇、一九八二）。

⑧拙稿「両部神道」（『国文学解釈と鑑賞』60・12、一九九五）参照。

⑨山本ひろ子「説話のトポス」（説話の講座『説話とは何か』勉誠社、一九九一）